

# 水リステクと企業



グローバルウォーター・ジャパン代表  
(国連テクニカルアドバイザー)

よしむら かずなり  
**吉村 和就**

PM2.5事件や7色の汚染河川で世界中に有名になった中国だが、今年7月に開催された「中国環境保護産業ハイレベルフォーラム」で、

環境保護部は、国として 止に3・7兆元(約60兆円)を直接投資すること

## 中国の水環境の現状(その2)

# 環境改善に60兆円を投入 チャンス到来の日本企業

を明らかにした。国務常任委員会は、「大気汚染防止整備行動計画」に1・7兆元(27・2兆円)、「水汚染防止整備行動計画」に2兆元(32兆円)を投入する計画である。

を明らかにした。国務常任委員会は、「大気汚染防止整備行動計画」に1・7兆元(27・2兆円)、「水汚染防止整備行動計画」に2兆元(32兆円)を投入する計画である。

スクリーン、散気装置、バルブなどに集中し、ほとんどは標準化レベルが低い機器に集中している。

い対応ができていない。また故障した際の責任問題と部品交換費の支払問題が頻繁に起こっている。

日本企業の狙いは再生水市場である。中国政

また中国の電気料金が従来に比べ2倍に引き上げられる中、水処理設備の省エネ技術も渴望されている。この分野も日本が得意とする分野である。勇気をもって信頼できる地場企業と組んで中国市場に参入する時期がきている。

### 汚水処理設備市場5つの課題

急拡大する、この汚水処理市場に中国の国内企業はどう参入するのか。内部から見た課題を整理してみよう。次の5つが挙げられる。

(1)国内企業数が多過場占有率も向上してきているが、その優位性は

(2)設備標準化が低レベル

(3)処理装置のコア部分は輸入品が主

(4)設備の品質格差大、サービステ体制の不備

も急増。同時に海外の大企業との攻勢も激しくなり、正に玉石混濁、熾烈な市場獲得競争が繰り広げられている。

中国ブランド製品の市場占有率も向上してきているが、その優位性は

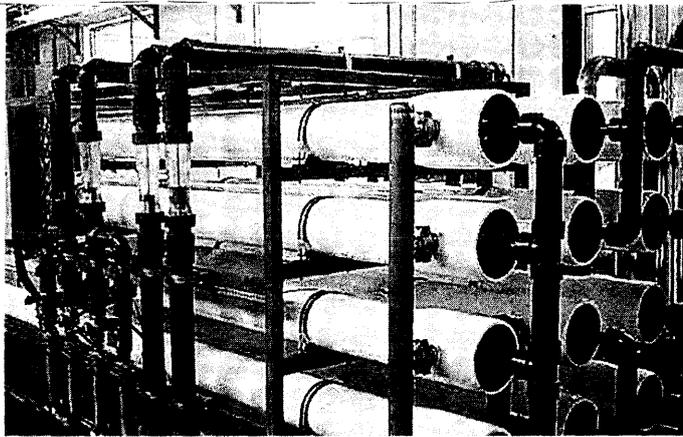
器、ポンプ、攪拌機、膜エレメントなどのコア技術は先進国が握っており、海外ブランドシェアは55%以上に達する。また技術移転にも未熟さが目立つ。

日本企業に商機はあるのか

上水道や汚水処理場への参入は、地方政府や地場設計院(あるいは地場

生水利利用率15%以上の達成を要求している。

天津工業大学の杜啓雲副所長は「最も有効な解決策は膜技術である」と述べている。この分野は日本企業が得意な分野であるが、今まで参入が難しかったのは、日本メーカーの高コスト体質と知名度の不足である。単純な膜メーカーは、中国国内に300社以上あると言われ、この分野は早くあきらめた方がいいだろう。RO膜(逆浸透膜)、MBR膜(膜式活性汚泥法)はこれからの性能、特にランニングコスト競争が繰り広げられる市場である。



中国製の海水淡水化装置(中のRO膜は外国製)